

防災教育学領域におけるアクション・リサーチ —BACEVモデルからの考察—

○近藤誠司¹⁾

1) 学会会員 関西大学社会安全学部、kondo.s@kansai-u.ac.jp

1. 問題意識

防災教育学領域における学問の使命として、喫緊の課題のひとつは、防災教育をどのように為すべきなのか、その方法論を仔細に検討することにあると言えるだろう。しかし、そのような「手段」の議論は活況を呈するほどに短視眼的・視野狭窄的な流派の違いに拘泥しやすくなる。そこで同時に、なぜ人は防災教育を為すべきなのか、哲学的・倫理的な意義を原理的に考究することが要請される。根底的な「目的」の精緻化作業があってはじめて、「手段」の体系をより堅牢なものとするができるはずである。

ところで、この「目的—手段」を同時に思索することのドライブは、常に社会との関わりの中で、その到達点を確認しておく必要がある。「目的—手段」を改革するアクションが、教育現場にとってみれば過度な干渉になり、逆機能を引き起こす事態も想定されるからである。したがって研究者の関わりは、矢守(2010)¹⁾のいうように、常にアクション・リサーチ(action research)の構えをとることになる。

本研究では、以上のような問題意識をふまえて、大学が基本的に把持すべき5つの機能を「BACEV (Bystander, Activator, Connector, Educator and Verification-practitioner) モデル」(近藤, 2018)²⁾と呼び、防災教育学領域における学問の営みのありかたを考察することにした。

2. BACEVモデル

「BACEV モデル」の5つの機能は、相互に排他的なものではなく、相補的な関係性を持っている。各機能の要点を以下にまとめる。

2.1 Bystander

研究者として、アクション・リサーチの構えに立脚して防災教育学領域に関与するならば、ともにコトをなす「共同実践者」もしくは「共同当事者」(矢守, 2018)³⁾というポジショニングをとることが適格的である。リスク・コミュニケーションの本義は、リスク・メッセージを一方向的に伝達することではない。コミュニケーションとは、コミュニティを形成すること(矢守・宮本, 2016)⁴⁾、コミュニティとは、「com」=共に、「munus」=贈り物を与え合う親密な関係性のことである(ティム, 2020)⁵⁾。

「アウトリーチ」という名のもとに断片的な知識を伝授することや、「リテラシー」というプラスチックワードを振りかざして結局は古典的な手法で教え込むようなことから距離をとる必要がある。学び合いの輪の中に、我が身を投じること、それこそが防災教育の活動を支援する際の出発点である(2.4も参照のこと)。

しかし、実際には「取り急ぎ、流行りの防災学習を実施しておきたい」という現場のニーズ(ときに、行政側のニーズ)が先に存在する場合もあることだろう。しかし、そのニーズに即応することは、長期的にみれば、防災教育学領域の「目的—手段」の両輪を駆動していくことにはつながらない。多くの関係当事者の「苦労を取り戻す」契機—たとえば、べてるの家の関係者が生み出したような潤沢な知恵の数々を参照のこと(斉藤, 2010)⁶⁾—を奪うからである。研究者の役割のベースメントには、現場からの依頼に真摯に耳を傾けながらも、宮本ら(2012)⁷⁾のいう「巫女の視点」から、まず、閉塞の深奥にある課題を共有することから始める必要がある。

2.2 Activator

ところで、仄聞によれば、Bystanderのままであればよいと都合よく曲解して、『いや、それは現場の皆さん自身が決めることです』と、安全地帯からの助言を繰り返し、結局は何も踏み込まない外部支援者もいるとのことである。難しい選択を前にしたときほど、『わたしはあくまで外部支援者/ファシリテーターですので、これ以上は申しませんが…』と傍観者のスタンスを決め込む。現場の決定にはコミットしない構えをみせて、自己に責任が及ぶことを回避する「壁の花モデル」の方略である(心理学では古典的な議論であるが、教育心理学の論者としては、たとえば、広瀬・尾関・鄭・市嶋, 2010)⁸⁾。

しかし、少なくとも実践的な立場から言えば、長らく伴走した関係性をテコにして、先んじて提案し、実行し、事態を動かすことが、死活的に重要となる局面がある。先に前奏をはじめてしまうことによって、事後的に見事な合唱がおこなわれるかのごとく。宮本ら(2012)⁹⁾のいうとおり、パターンリズムには、良いパターンリズム

と悪いパターンリズムがあり、「パターンリズムが悪い」と原理主義的に批判する構えも、そろそろ脱構築しておく必要があるだろう。

2.3 Connector

研究者は、普段から様々な関係者とネットワークを築いている。エントリーしたフィールドの中において、様々な関係者—学校関係者、地区住民、別の専門家、報道従事者など—を取り結ぶ結節点となるポテンシャルもある。また、フィールドの外から、「ナレッジブローカー」（たとえば、矢守, 2013）¹⁰⁾のポジショニングを取ることができる人物を招来することも十分可能である。

ところで最近では、防災教育学領域において「インクルーシブ防災」という言葉が散見されるようになった。国連などで提唱されている「Inclusion&Diversity（包摂と多様性）」というコンセプトがベースにあると思われるが、そのアクションが仮に「弱い立場の人を包摂する構え」という意味だけで用いられているならば、不十分な理解であると言わざるを得ない。本義は、Diversityを起点にして、我々は「ともに包摂し合う」社会を構築していくことの謂いである。共同性がまず先にあることは、以下の2.4からも確認しておきたい。研究者は、そのつなぎ手になり得る。だれがつながれるとよいか、だれがまだつながれていないのか、注意を喚起する使命がある。

2.4 Educator

フィールドにおいて関わる人々は皆、相互に学び合うことができるかけがえのない仲間である。エデュケーションの原語、ラテン語のエデュカール（educare）とは、本来、「引き出す」という意味を持っている。他者との出会いの中で、それぞれに潜在した想いやアイデアを引き出し合う。共同的な営みにおいては、研究者も、常に自身の変化に対して自覚的であることが重要である。成長するのは、児童・生徒だけではない。

2.5 Verification-practitioner

単なる精神論を立脚点として「やらないよりもやったほうがまし」との構えで防災教育の旗振りをするのであれば、研究者が自らの資源を持ち出してまでフィールドに関わることの意義は大きいとは言えまい。取り組みの効果を、共同実践の中において真摯に検証すること、この点においてこそ研究者のレゾナートルが試されると考えるべきである。

そしてここではもちろん、「見たいものしか見ない」という陥穽が待ち受けていることに留意しなければならない。アクション・リサーチ（research in action）を、research for actionに墮するバージョンにしてはならない。

すでに千々和・矢守（2020）¹¹⁾が鋭く指摘しているとおり、多くの実証的な研究が、ありきたりの独立変数をおき、従属変数の変動を短期間のpre/postで見出そうとするがあまり、独立変数自体の使い勝手を確かめるだけの愚に嵌まっている。フィールドのベターメントを検証するための実存的な指標、それ自体がなんであるのかを当事者と共に創造することが求められる。ここにおいても、共同性がまず先にあることを指摘しておきたい。

参考文献

- 1) 矢守克也：アクションリサーチ 実践する人間科学、新曜社、2010.
- 2) 近藤誠司：地区防災計画策定事業における“大学人”の役割 —BACEVモデルによる基礎的考察—、地区防災計画学会誌、第14号、2018.
- 3) 矢守克也：アクションリサーチ・イン・アクション 共同当事者・時間・データ、新曜社、2018.
- 4) 矢守克也・宮本 匠：現場でつくる減災学 共同実践の五つのフロンティア、新曜社、2016.
- 5) ティム・インゴルド：人類学とは何か、奥野克巳・宮崎幸子（訳）、亜紀書房、2020.
- 6) 斉藤道雄： 治りませんように べてるの家のいま、みすず書房、2010.
- 7) 宮本 匠・渥美公秀・矢守克也：人間科学における研究者の役割—アクションリサーチにおける「巫女の視点」—、実験社会心理学研究、52巻、（2012-2013）1号、pp.35-44、2012.
- 8) 広瀬和佳子・尾関 史・鄭 京姫・市嶋典子：実践研究をどう記述するか —私たちの見たいものと方法の関係—、早稲田日本語教育学、第7号、pp.43-68、2010.
- 9) 宮台真司（監修）：統治・自律・民主主義 パターンリズムの政治社会学、現在位相研究所（編）、NTT出版、2012.
- 10) 矢守克也：巨大災害のリスク・コミュニケーション 災害情報の新しいかたち、ミネルヴァ書房、2013.
- 11) 千々和詩織・矢守克也：長期的な視点に立った学校防災教育の実施と検証に関する試論、災害情報、No.18-01、pp.25-33、2020.